

英国雑誌 Monocle 掲載記事の紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 悟視, NAKAYAMA, Satomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000216

【資料】

英国雑誌 *Monocle* 掲載記事の紹介

中山 悟視

1. はじめに

Monocle(ISSN 1753-2434) は、カナダ人ジャーナリスト Tyler Brûlé によって 2007 年に創刊された英国の雑誌である。年 10 回刊行されるこの雑誌は、主に世界情勢（ヨーロッパ、アフリカ、アジア、南北アメリカ、オセアニアの大陸ごとの記事が配されている）を取り扱っているが、小説の映画化や音楽などを含む文化事情や、服飾や住宅などのデザイン分野に至るまで、国際的な視野からさまざまな情報を提供している。2007 年 2 月 15 日の創刊号では、日本の自衛隊を取材した記事が掲載され、自衛隊員の姿が記念すべき表紙を飾っているほか、マンガ文化やゴルフクラブづくりの職人といった日本人・日本文化も紹介されている。

2012 年第 6 号（通巻 56 号）には、海上保安大学校の取材記事が、20 枚の写真とともに掲載された（236-49 頁）。ここでは、その記事の内容を日本語に翻訳して紹介する。

2. 記事の翻訳

「最高水位一日本」

覚えやすいとは言えない「九州南西海域不審船事案」としても知られている、奄美大島の戦¹⁾は、アジアでは良く知られた抗争ではないが、奇怪な事件の一つであることは間違いない。2001 年 12 月 22 日早朝、海上保安庁巡視船艇は、奄美大島付近において、一艘の北朝鮮の不審船を高速

で追跡し、6 時間におよぶ銃撃戦²⁾を繰り広げた。銃撃戦では、一千発もの銃弾が放たれ、一時、北朝鮮側は小型のロケット弾を撃ってきた。しかし事件は劇的な終焉を迎えた。北朝鮮側が自爆し、ボートを沈めてしまったのだ。不鮮明ではあるものの、海上保安官による映像は、素晴らしい映画の一場面のような。それは、およそ現実とは思えない、映画館の前座席で我々が目にするような、パニックに陥った叫び声や爆発の音声に充ちた恐ろしい邂逅なのだ。これが本当に起こったという事実がなければ、映画『007』シリーズのジェイムズ・ボンドや『ボーン』シリーズのジェイソン・ボーンの、あり得ないようなオープニング場面を見事に演出しているかのようである。

不審船は数年後に引き上げられると、トロール船を装った偵察船であったことが確認され、現在は横浜にある海上保安資料館に展示されている。銃弾を受けた海上保安庁の船舶のうちの一隻は、呉の海上保安大学校内にある海上保安資料館において最も重要な展示品となっている。このことは、大学に通う学生に将来彼らの仕事が、遊覧するレジャー船が海難に遭わないように見守りながら沿岸地域を巡航することばかりではない、ということを思いださせてくれる。

「休みのない仕事です。我々は常に準備をしています」と、第六管区海上保安本部広島航空基地長、南晴雄氏は言う。一つ所に落ち着くことのない仕事である。たいていの場合一つの職務は 2 年、せいぜい 3 年しか続かない。南氏は 35 年間で、北は酷寒の北海道から南は亜熱帯の沖縄まで、15 の職場に配属された。「どこへ行っても大変な仕事には変わりありません。どんな天気であろうと出かけなければならないのです。」

1948 年に設立された Maritime Sea Agency³⁾（海上保安

庁)は、2000年には国際的により認知度の高い英語名 **Japan Coast Guard** に改称された。本部を東京の官庁街である霞が関に置く海上保安庁は、国土交通省の外局の一つである。その職域は、日本の沿岸海域のパトロール、捜索および救助、海洋調査、海洋環境の保護、極めて重要なものとして、海洋秩序の維持などに至る。すなわち不法漁業や薬物の密売買から海賊行為や反テロリズムまでのすべてを取り扱うことを意味している。これは世界の外交機密に関わる非常に複雑な役割であり、大小 448 隻の巡視船艇と 27 機の航空機、46 機のヘリコプターを抱え、年間に 1779 億 6100 万円（18 億ユーロ）程度が配算されている。

相当な数字であるが、実際、海上保安庁はそれに見合った職務に追われている。日本は、陸地面積（380,000 平方キロ）に関しては世界において 61 番目と低い、領海および排他的経済水域は、その 12 倍の大きさを誇り、世界でも最も大きい国の一つである。そうした海域には、東アジアで最も熱く議論が交わされている領土問題に関わるいくつかの島が含まれている。日本海側に竹島（韓国では独島）、はるか南に沖ノ鳥島、北に千島列島／北方領土（英語ではクリルアイランド）、東シナ海に尖閣諸島。海上保安官の中には（公的な不満を述べるのには抵抗を示しながらも）自らの総人員（12,000 人）と警視庁のそれ（40,000 人）との違いを指摘するものもいる。

自衛隊（*Monocle* 創刊号参照）も日本の沿岸をパトロールしているが、海上保安庁こそが（海上での逮捕権を有して）海上の最前線に立っているのだ。海上保安庁は、日本を 11 の管区に区分し、それぞれに管区本部、航空基地、観測所、交通センターを配している。管区によっては他よりも多くの危険を伴う場合もある。現在、緊張感の高まっている地域は尖閣諸島で、中国（中国では **Diaoyutai** と呼ぶ）

と台湾（台湾では **Tiaoyutai** と呼ぶ）からも領有を主張されている岩に囲まれた島嶼群（群島）である。尖閣をめぐっては、（豊かな漁業専管水域と利用可能な石油やガスの埋蔵地としてその役割を果たしてきた）長い歴史があるが、その群島は、沖縄県石垣市から日本人によって管理されている。

ここ数カ月、中国と台湾の船が尖閣諸島周辺海域に入ってきている。日中関係は最善の時期であっても一触即発だが、尖閣問題は間断なく二国間の緊迫状態を危険なレベルにまで追いやっている。2010年9月中国のトロール船が海上保安庁の船舶と衝突し、トロール船の船長が逮捕された際には、大きな外交上の騒動が噴出した。この問題はいまだ両国の関係を悪化させ続けている。

長い職務の過程において、海上保安官は、尖閣諸島に常に目を光らせておくことができる石垣市への異動も想定される。南基地長は尖閣巡航についてこう述べている。「台湾の漁船を見かけます。もちろん彼らはそこにいてはいけないので、出て行くように告げます。」

今年のはじめ、政府は国会にいくつかの法案を提出した。法案は、海上保安庁法および外国船舶の航行に関する法律の改正を提案するものであった。この変更の背景にあるのは、増加する日本領海への侵入に直面している海上保安庁の権力を強化したい、という考えである。尖閣や沖ノ鳥島のような孤島を念頭においたこの改正によって、海上保安庁は、離島へ上陸しようとする者を逮捕する権利を有することになる。現行では直近の、おそらく数百キロ離れた警察署に連絡しなければならず、連絡を受けた警察はボートやヘリコプターでその島へ駆けつけなければならないのである。改正法案によって、海上保安庁は、立入検査なしに

日本の領海から出て行くように命じる権限を与えられることになり、そうすることによって、立入検査に時間を要することのある悪天候であっても、即刻退去を求めることができるのである。

第六管区海上保安本部広島航空基地には、12人の研修生を含む43人の職員がいる。この地から、島が密集している地域ではあるが比較的平穏な瀬戸内海を見守っている。そこは領海侵犯よりも国内の密漁に関わる犯罪が多い地域である。木下敏和次長は言う、「我々が扱っているのは、ほとんどが不法漁労や海洋投棄です。漁師たちは犯人が誰か知っています。私たちに捕まえてほしいと思っているのです。」衝突があつたり、船や人が海上で危険に遭遇していれば、彼らは出動する。木下氏は言う、「みんなこの辺りで釣りをするのが大好きなんです。天気が悪い時だって釣りをします。時間を忘れて、気づけば潮の流れが変わっている、そんなことがよくありますよ。」

広島航空基地には3機のヘリコプターと1機のセスナ206Fがある。ベル412型は、見た目は普通のヘリコプターだが、底部にはサーチライトがあり、側部には吊り上げ装置、暗闇でも捜索ができるようにする赤外線ライト、警告を伝えるためのスピーカーなどを備えている。ヘリコプターは一見派手だが、「見世物ではない。パトロールで低く飛行した後には、潮のしぶきをいっぱいに浴びてしまいます。だから（パトロールを終えて）メンテナンスを受けなければならないのです。」と木下氏は言う。

海上保安庁の航空パイロットは、自衛隊の一部門である海上自衛隊（JMSDF）とともに訓練を受ける。ヘリコプターのパイロットは仙台にある海上保安庁訓練センターに入る。尾崎晴雄飛行長は、38年間に渡って13の職務についてきた、最も優秀なパイロットの一人である。「私の好きだ

ったのは石垣市です。一年で 100 回ヘリ運航を行い、離島から沖縄の病院まで移送しました。」と尾崎氏は言う。

昨年 3 月に東日本を襲った津波が甚大な被害をもたらした後、海上保安庁はすぐに活動を開始し、360 人を救助した。そのうち 279 人は上空からの救助であった。それは過酷な時間だった。仙台航空基地は、完全に浸水し、2 機の航空機と 2 機のヘリコプターを失った。航空機の（海上保安庁）乗組員は東京の羽田空港に待機し、北方へ救助に向かわなければならなかった。

呉市にある大学校では、幹部候補の学生（将来の海上保安官）が基礎の全てを身につけることを期待されている。潜水、銃撃、剣道から、国際法、数学、気象学に至るまであらゆる分野である。学生は 4 年間授業を受けた後、専攻科で学ぶ 6 カ月のうち 3 か月に渡って練習船こじまで世界を一周する。その全てを終えたと、毎年 40 人ほどの修了生たちが学位を取得し、下級士官（三等海上保安正）として巡行船に乗る最初の課題へと出発する。大学校は海を見渡す平穏な場所、かつて海軍基地のあった土地に位置している。周囲に鳴り響く造船所の音は、造船の中心地としての呉の歴史を思い起こさせてくれる。学生は常に一緒に生活を送る。同じ教室で授業を受け、同じ食堂で食事をし、きれいな学寮で睡眠をとる。それが海上での生活のよい練習になるのだ。164 人の学生のうち 22 人は女子で、彼女たちは男子と一緒に訓練を受けるが、女子棟に彼女たちの寝室はある。

海上保安官でも特に注目されるのは潜水士だ。彼らの存在は映画『海猿』の登場で突如として知られるようになった。このアクション映画の大ヒットシリーズは、ベストセラーとなった漫画に基づいており、海上保安官仙崎大輔役

俳優伊藤英明が主演している。映画の中で、伊藤が英雄的な救助活動から戻ったばかりの潜水スーツ姿で何度となく顔を出すことで、海上保安官の良いイメージを我々に植えつけた。第4作『ブレイブ・ハーツ』は、夏休み中というこの上ないタイミングで封切られた。過去2作で150億円（1億5700万ユーロ）の興行収入を得ており、今作への期待は高い。

「もちろん、大げさです。エンターテインメントですよ。」木下敏和氏は映画『海猿』をそう評す。「本当の我々の仕事はあんなに派手なものではありませんが、しっかりと人を助けようと思っています。」映画の宣伝効果はたしかに学生募集に役立っている、と誰もが認めている。「『海猿』以前は一般の人たちは我々が何をしているのか、我々が海上自衛隊とどう違うのか知りませんでした。」と尾崎氏は言う。

実際の潜水士も失望させることはない。大学校の講師は恐い教官だが、銃撃戦で味方につけたいような頼もしい人間だ。「確かにつらいこともあります。一番大変だったのは、1995年の阪神・淡路大震災⁴⁾の後でした。海岸線に沿って、行方不明者を探しました。」ここ呉で、彼は数人の学生グループを指導している。彼らは、近くに停泊している船「くろせ」で訪れていた3人の潜水士たちから、プールで訓練を受けているのだ。「学生は肉体的な強さと基本的な協調性を身につけることが重要です。」とその講師は言う。俳優伊藤英明は、ここで潜水訓練を受けた。彼の潜水スーツは資料館で一番の呼び物となっている。

学生の中にはカッター部に所属しているものもいる。カッター（端艇）とは、重い木製の漕ぎボートで、今では日常業務に使うことはないが、チームワークの精神や古きを知るという思いで利用されている。学生時代に部員の一人だった講師の監視の下、漕ぎ手（部員）たちは授業が終わ

ると集まり、海へと漕ぎ出していく。漕ぐのは大変だが、全員で協力し、声を合わせて叫ぶ。その講師によれば、だからこそいまだに学生は端艇を漕ぐ。「本当に体を使う競技だし、チームとして力を発揮しなければならない。」

その職域の広さのため、海上保安庁はさまざまな国や機関と協力していかなければならない。環境犯罪を含むあらゆる問題に関する情報を共有している。夜間の不法投棄から、名前も番号もなく遺棄されたボート、密輸、人身売買に至るまで、その情報はさまざま。海上保安官は南アジアの海域に赴任し、他国の保安官と一緒に仕事をすることもある。国境が海にある以上、安全を保証し、航路を確保することが秩序維持に不可欠なのである。

国内をさらに北方に進んだ地域においては、海上保安庁は多国間関係の構築に従事している。合同演習を実施したり、領土問題を巡って議論をしている当該国である中国、韓国、ロシアの海上保安庁にあたる諸機関と仕事をする。北太平洋海上保安フォーラムにより、4カ国が一堂に会し、アメリカとカナダとともにさまざまな情報を集めて分析し、海事法を強化する。

政府レベルの外交上の騒動に反して、海上保安庁は近隣諸国との良い関係が必要であることを分かっている。南氏は言う、「日本周辺の海域は、他国とも密接に関わっている。我々は海を共有しているのだから、一緒に仕事をしていかなければならないのだ。」

3. 結び

以上が、モノクル 2012 年第 6 号に掲載された記事の翻訳である。取材は、2012 年 7 月 3 日に外国人記者 1 名、通訳 1 名、カメラマン 1 名が、翌 4 日にはカメラマン 1 名が来校して行われた。この記事は、大学校にまつわる写真 20 枚

とともに掲載されているので、この紹介記事を参照のうえ、2012 年第 6 号を手にとってご覧いただきたい。

余談ではあるが、この雑誌には、元サッカー日本代表の中田英寿氏も、創刊から編集に関わっており、Contributors の一人に名を連ねている。その他にも、日本に関連のある記事を見つけることができるので、ホームページ (<http://www.monocle.com/>) をチェックしてみることをお勧めしたい。

注

- 1) 記事原文は、“The Battle of Amami-Oshima”と表記されているため、「戦」という表現を使った。
- 2) 実際に不審船が攻撃を始めてから沈没に至るまでの時間は数分であった。
- 3) 記事の中では、Maritime Sea Agency と表記されているが、正しくは Maritime Safety Agency である。
- 4) 記事原文は、“the Kobe earthquake”と表記されている。